



自由地と自由貨幣による自然的経済秩序

シルビオ・ゲゼル著 相田慎一訳
 ぱる出版 2007

経済学部教授 相田 慎一

私がかつても長く付き合った学問的著作のひとつは、シルビオ・ゲゼルの主著『自由地と自由貨幣による自然的経済秩序』であるだろう。というのも、私はこの本を邦訳するためにほぼ 10 年以上の歳月をかけたからである。悪戦苦闘の連続だった。それでも私がなんとか邦訳書の出版にまでこぎつけることができたのは、次のような思いであった。これまでの社会主義思想は、平等・公正とともに自由を謳いながらも、強力な国家による所得の再分配を求めたために、「個人の自由」を抑圧する全体主義体制を作り上げてしまった。今や必要なのは、「個人の自由」や「個性」を無条件に擁護する社会主義思想である。このゲゼルの主著の中にその可能性があるのかもしれない。もしあるとすれば、一刻も早くこのゲゼルの主著を日本の読者に紹介しなければならない、と。

このゲゼルの主著を邦訳して分かったことは、次のことだった。「個人の自由」や「個性」を保障する経済システムとは、だれでもが公平にかつ自由に参加できる市場経済である。だが、その市場経済は、地代や利子といった「不労所得」が特権的地位を占める現存の市場経済ではなく、地代や利子といった「不労所得」が廃絶された市場経済でなければならない。こうした市場経済を作るためには、土地の社会化によって地代を廃絶する「自由地改革」と時間とともに減価していく貨幣（利子のない貨幣）の導入といった「自由貨幣改革」という二つの経済改革が必要になる、と。このゲゼルの経済改革論から地域通貨という新たな思想が生まれ、それは経済のグローバル化のなかで地域を守るとうとする人々の貴重な実践的武器になっている。ぜひ大学 4 年間の間に読んでほしい。そしてそこから新たな思想と実践的武器を作り上げてほしい。



サッチャー時代のイギリス - その政治、経済、教育

森嶋通夫著 岩波書店 1989 (岩波新書)

経済学部教授 永島 剛

20 世紀後半の世界において大きな存在感を發揮した政治家の一人に、イギリスのマーガレット・サッチャー首相（在任 1979-90 年）がいます。イギリス初の女性首相であり、その断固とした政治姿勢から、「鉄の女性 (iron lady)」とも呼ばれました。

彼女の首相就任時、イギリス経済は、アメリカ・西ドイツそして日本などくらべて成長が鈍く、その経済停滞は「英国病」ともいわれていました。そうしたなか、インフレ抑制や国営企業の民営化、金融自由化をはじめとする規制緩和による市場競争促進、社会保障予算の削減などをつうじて、サッチャー首相は「強いイギリス経済」の復活をめざしました。「サッチャリズム」とも称される一連の政策は、イギリスにとどまらず、いまや世界がその影響力と無縁ではいられないネオ・リベラリズム（新自由主義）実践の先駆といえます。今日のグローバル市場の一大中心地としてのシティ（ロンドンの金融街）の繁栄はサッチャリズムの成果であるという高い評価がある一方、経済を不安定化させ、格差社会を深刻化させたという批判もあります。

ここで紹介する本は、ロンドン大学で教授を務めていた日本人経済学者による、サッチャー政権の終盤期 1988 年に出版された、日本におけるサッチャリズム評論のいわば「古典」です。サッチャー元首相は、昨年（2013 年）4 月に 87 歳で亡くなりました。いま改めて、今日の世界経済、そして日本経済のあり方をめぐる議論にも影響を与えているサッチャリズムとは何であったのかを知り、考えてみることは、これから大学で経済学や政治学など社会科学を学ぶみなさんにとっても、きっと有意義であろうと思います。